広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中世スペイン語に於けるPersonal Accusative "A"とLeísmoについて（13世紀，法律文書を中心とする研究序説）
Author(s)	石岡，精三
Citation	ニダバ , 11 : 32 - 43
Issue Date	1982-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047136
Right	
Relation	

論　　文

中世スペイン語に於ける Personal Accusative "A" と Leísmo について（13世紀，法律文書を中心とする研究序説）

石　岡　精　三

§1

現代スペイン語に於いては，人間を表わす対格目的語は前置詞 A によって導入される場合が多い。この前置詞 A はラテン語の Ad を来源とし，本来与格目的語の表現に用いられるものである。このタイプの対格目的語表現方法はスペイン語のみならず，他のロマンス諸語にも見られる。例えば，ルーマニア語では，ラテン語の Per を来源とする P(r)e によって，対格目的語が導入される。また，人間を表わす対格目的語が Ad の継承形によって導入される言語として，スペイン語の他に，ポルトガル語，イタリア南部諸方言，ベアルン方言等がある。[注(1)]

また人間を指す対格目的語が，前置詞句によって表現されるロマンス諸語の中でも，スペイン語は，この形態を最も発達させている言語と言ってよかろう。結果として，現代スペイン語では，当該目的語(対格)と与格目的語の形態が同一のものとなる場合が非常に多くなっている。例えば，

Le di un libro a Juan. (与格目的語)

Le vi morir a Juan. (対格目的語)

また一方，現代スペイン語では，この両目的語の形態上の一致が人称代名詞の領域にまで拡張されつつある。ラテン語から継承された 3 人称代名詞の対格形，与格形は以下の如くである。

表－Ⅰ　(対格形)

	男　性	女　性	中　性
単　数	lo (＜illum)	la (＜illam)	lo (＜illud)
複　数	los (＜illos)	las (＜illas)	

表－Ⅱ　(与格形)

	男　性	女　性	中　性
単　数	le (＜illi)	le (＜illi)	
複　数	les (＜illis)	les (＜illis)	

ラテンアメリカでは，この継承形が殆んど完全に保存されているが一方，本国スペイン語，特に口語に於いては，男性対格形の lo, los が後退し，与格形の le, les に取って代わられる場合が多い。[注(2)] つまり，本国スペイン語の 3 人称代名詞の対格形は表－Ⅲのようになっている。

表－Ⅲ

	男　性	女　性	中　性
単　数	le (lo)	la [注(3)]	lo
複　数	les (los)	las	

このように，男性対格形として，与格形の le, les が用いられる現象は一般に Leísmo と呼ばれている。後述するように，この Leísmo は Personal Accusative "A" よりも後の時代の変化である。しかし，既にスペイン語史上，最初の文学テキストである Cantar de mio Çid にも現われている。例えば，

Cid 21　Conbidar le ien de grado, mas ninguno non osava

同364　por mio Çid el Campeador, que Dios le curie de mal

同585- b　Ca si ellos le prenden, non nos daran dent nada

同1245　tomassenle el aver e pusiessenle en un palo

等が見られる。

Leísmo に関する従来の研究では， Personal Accusative "A" が考慮されず，また資料として文学テキストが選ばれるのが通例である。本稿では，これら両事象の歴史的研究の第一歩として，カスティリア方言で書かれた法律文書， Fuero Juzgo (FJ) , Las Siete Partidas の第 4 部(PartⅣ)と第 7 部(PartⅦ)， Fuero de Alcaraz (FAz)，Fuero de Alarcón(FAn)を資料とし， Lapesa, R. (1968)， Brewer, W. B. (1970)を引用しつつ，両事象の関係について若干の考察が試みられ，基本的問題点が指摘される。

§ 2

最初に， Personal Accusative "A" と Leísmo がどの程度用いられているか，その出現率[注(4)]を見る。出現率は全用例を調べて算出すべきであるが，本稿では約40の動詞は全テキストに亘り，その他の動詞は，各テキストが概ね等質であるので， FJ, PartⅣのみについて調査した。その結果 "A" は2481例中，943例で用いられ，出現率は38.0％となる，一方，Leísmo に関しては，1625例中，156例がそれであり，出現率は9.6％となる。[注(5)]

文学テキストでは如何なる出現率となっているだろうか。Lapesa, R. (1968)に依れば， Cantar de mio Çid では， lo が34例， le が24例， les が 4 例， los が154例である。つまり，Leísmo の出

現率は16.3%となる。"A"の出現率を同テキストで実際に調べると，"A"の例が157例，"A"が用いられていない例が148例，つまり出現率は51.5%となる。[注(6)] 上の数値に依れば，本稿で扱う法律テキストは文学テキストであるCantar de mio Çidよりも，より古い言語状態を示していると言えよう。つまり，よりラテン語の格体系に近いものとなっている。この意味で，将来の歴史的研究の第一歩としての本稿で，これらの法律文書を資料とすることに多少とも意義が認められるものと考える。そしてまた，各々の出現率が示すように．Leísmoの事象はPersonal Accusative "A"よりも，歴史的に後の発展であると言って良かろう。

以下に於いて，「使役」，「放任」，「阻止」等を表わす特定構文と若干の動詞に関して，Leísmo, Personal Accusative "A"の用例を吟味する。

① Mandar構文

Part Ⅳ. T(ⅩⅠ)L(ⅩⅤ) Obligado seyendo alguno de debdo que deba á alguna muger, si ella quisiere casar, bien puede mandar á aquel so debdor que dé en dote á su marido aquello que debie á ella.

Part Ⅳ.T(ⅩⅤ)L(Ⅶ)

Instrumento ó carta faciendo algunt hom por su mano mesma, que mandándola facer á alguno de los escribanos públicos, que sea firmada con testimonio de tres homes bonos,...

Part Ⅶ.T(Ⅵ)L(Ⅳ)

Leno en latin tanto quiere decir en romance como alcahuete, et tal home como este quier tenga sus siervas ó otras mugeres libres en su casa mandándoles facer maldat de sus cuerpos por dineros,...

ラテン語では本来Mando＋対格＋不定法，Mando ut ～，Mando ne ～で用いられたが，比較的早い時期から対格の代わりに与格が用いられていたとされる。本稿テキストでは，mandar＋目的語＋不定法，mandar＋目的語＋que接続法の型で用いられている。全用例を調べると，以下のようになる。目的語が3人称代名詞の場合，[＋Leísmo]が17例，[－Leísmo]が3例，[＋"A"]で47例，[－"A"]で2例となる。つまり[＋Leísmo]，[＋"A"]が優勢となっている。

② Facer構文

FJL(Ⅶ)T(Ⅰ)L(Ⅰ)

E todavía depues quel acusado saliere sin culpa, el iuez constringa el acusador fata quel presente aquel, quien le fiziera entender el furto,...

FAn (288)

Si alguno fiziere a otro comer cosa suzia por fuerça o por enganno, ...peche

.CCC. sueldos...

このタイプの構文では，目的語が[+Leísmo]で2例，[−Leísmo]で0例，[+"A"]で101例，[−"A"]で7例となる。ここでは[±Leísmo]に関しては不明であるが，[+"A"]が優勢となっている。

③ Dar 構文

この構文も前述の Mandar, Facer 構文同様，使役を表わすものである。例えば，FAz L (Ⅱ) T (XⅧ)

Mas si los contendores fueren aldeanos, el querelloso aplaze a su aduersario a tercer dia a la puerta del iuez, e el iuez dé les por iuyzio que vayan a desterminar, poniendo les plazo assi como sobredicho es.

この用例中，代名詞ではすべて[+Leísmo]であり10例，[+"A"]，[−"A"]はそれぞれ1例となっている。

④ Demandar 構文

FJL (Ⅶ) T (Ⅳ) L (Ⅰ)

E si el iuez no lo puede luego prender por sí solo, demande al sennor de la tierra quel ayude, ...

FJL (Ⅳ) T (Ⅴ) L (Ⅰ)

... por ende tollemos la ley antigua que demandaba al padre y á la madre, y al avuelo y al avuela dar su buena á los estrannos si quisies, ...

この構文では[+Leísmo]が2例，[−Leísmo]は0例，[+"A"]が11例，[−"A"]が0例となる。

⑤ Defender 構文

Part Ⅳ T (Ⅸ) L (Ⅱ)

... ca asi como es defendido á todos comunalmiente que ninguno non faga adulterio, ...

上例の受動文より Defender ＋与格目的語＋ que 接続法という構文の存在が確かめられる。また，que 接続法の節が対格(直接)目的語と意識されていたと言えよう。用例を調べると，[+"A"]が7例，[−"A"]が0例，[+Leísmo]が1例，[−Leísmo]が4例となっている。次の例は[−Leísmo]の用例である。

Part Ⅳ T (Ⅱ) L (XⅧ)

... si la eglesia las defendiese por alguna destas razones, que non casen fasta que sopiesen ciertamiente si era el embargo atal ...

この Defender 構文より推測される[+"A"]，[−Leísmo]の優勢な状況は，以下に例示する Apremiar 構文，Co(n)strennir 構文，Amonestar 構文，Embargar 構文，Consejar 構文にも見ら

れる。

Part Ⅳ T (Ⅰ) L (Ⅹ)

... por tal razon non las puede él apremiar que lo fagan en todo ...

FJL (Ⅵ) T (Ⅳ) L (Ⅲ)

..., y el obispo de la tierra y el sennor le constringa que faga fazer emienda de su buena al qui non quisiere fazer emienda ni derecho, ...

Part Ⅳ T (Ⅸ) L (Ⅴ)

Denunciado seyendo públicamiente en alguna eglesia como quieren algunos casar, et amonestando el clérigo á los que hi estodiesen ..., que lo dixiesen fasta algunt dia que les señalase, ...

Part Ⅶ T (ⅩⅩⅤ) ... et qué pena meresce quien los embargare que se non tornen cristianos, ...

FJL (Ⅶ) T (Ⅱ) L (Ⅵ)

Si algun omne conseja á siervo ajeno que faga furto, ...

調査結果は，Apremiar 構文に於いては[＋Leísmo]が 5 例，[－Leísmo]が 9 例，[＋“A”]が10例，[－“A”]が 0 例，Co(n)strennir 構文では，[＋Leísmo]が 2 例，[－Leísmo]が 9 例，[＋“A”]が 6 例，[－“A”]が 5 例，Amonestar 構文では，[＋Leísmo]が 0 例，[－Leísmo]が 2 例，[＋“A”]が 8 例，[－“A”]が 6 例，Embargar 構文では，[＋Leísmo]が 2 例，[－Leísmo]が 5 例，[＋“A”]が 4 例，[－“A”]が 0 例，Consejar 構文では[＋Leísmo]が 1 例，[－Leísmo]が 0 例，[＋“A”]が 4 例，[－“A”]が 1 例となる。[注(7)]

⑥ Rogar 構文

FJL (Ⅰ) T (Ⅴ) L (Ⅱ)

Si algun omne es rogado que sea testimonia de algun escripto, non meta y su sennal por nenguna manera, ...

この受動文は，Rogar ＋対格目的語＋ que 接続法の存在を予見するものである。しかし以下の例の如く，本稿資料ではすべて[＋Leísmo][＋“A”]の用例のみである。

FJL (Ⅰ) T (Ⅴ) L (ⅩⅠ)

..., quando que faze la manda ruega á otri que escriva por él, ...

FJL (Ⅰ) T (Ⅴ) L (ⅩⅠ)

..., é depues que iuraren que aquel cuya era la manda les rogó que fuesen sus testimonias, ...

⑦ Dexar 構文，Ver 構文，FacerA－B 構文

Part Ⅶ T (XXⅣ)

... et por qué razon la eglesia et los grandes señores criatianos los dexaron vivir entre sí, ...

FJL (Ⅱ) T (Ⅴ) L (XⅥ)

... porque viemos ya muchas vezes los fiios é los nietos contender sobre tales cosas entre sí, ...

Part Ⅳ T (XXⅡ) ... et qué derecho ha el señor en la persona et en los bienes del que era su siervo despues que lo ha fecho libre, ...

これらの構文は概ね同じ傾向を示し，また個々の用例が少ない為，一括して取り扱うことにする。[+Leísmo]が2例，[−Leísmo]が29例，[+"A"]が15例，[−"A"]が29例となっている。[−Leísmo]，[−"A"]が若干ながらも優勢となっている。

⑧ Llamar A−B， Decir A−B 構文

Part Ⅶ T (XXⅤ) L (Ⅲ)

Viven et mueren muchos homes en las creencias extrañas que amarien seer cristianos, si non por los aviltamientos et las deshonras que veen recebir de palabra et de fecho á los otros que se tornan cristianos, llamándolos tornadizos, ...

FAn (261)

Todo aquel que a otro dixiere malato, o cornudo, o fodido, o fijo de fodido, peche .II. morauedis, si prouarlo pudieren, ...

この構文では[+Leísmo]が1例，[−Leísmo]が5例，[+"A"]が24例，[−"A"]が4例となっており，[+"A"]が特に優勢である。また目的語が人間以外の無生物である場合も[+"A"]が頻繁に用いられ，関係代名詞の que もまた[+"A"]で現われる。後者の用法は，他の構文，他の動詞には殆んど見られないものである。例を挙げると，

Part Ⅶ T (XXⅥ) L (Ⅱ)

... si fuere el herege predicador. á que dicen consolado, débenlo quemar en el fuego, de manera que muera en él.

以上で，構文別に[±Leísmo]，[±"A"]の使用状況を簡単に述べた。これらの構文はあまり用例数が多くなく，確定したこととは言い難いが，大きく3つのグループに分類できるであろう。第1のグループは，[+Leísmo]，[+"A"]が優勢となっている。Mandar 構文，Rogar 構文がこれに属する。[注(8)] 第2のグループは[−Leísmo]，[+"A"]が優勢であると思われる Defender 構文，Llamar A−B 構文，Apremiar 構文等から成る。第3のそれは[−Leísmo]，[−"A"]が若干ながらも優勢である Dexar 構文，Ver 構文等である。

Lapesa, R. (1968)で，Leísmo の発生，発展に影響を与えた要因として，大きく 2 点が指摘されている。第一に，ラテン語に於いて殆んどの場合与格目的語をとる一連の動詞の継承形について言及が為される。この継承形の例として，(A) Menazar (<Minari Alicui), Ayudar, Nozir, Obedeçer, Parçir, Acorrer, Servir 等が挙げられている。次いでこの要因を側面から強力化するものとして，当該構文[注(9)]について述べられる。[注(10)] つまり，ラテン語に於いて既に対格目的語が与格によって置き換えられたと述べ，この与格目的語がスペイン語に継承されたとしている。そして，これらの構文での多くの用例を文学テキストの中から挙げている。このように Lapesa, R. (1968) は，Leísmo の発生，発展をラテン語の格体系から説明している。つまり彼の説明原理は，人称代名詞での Leísmo に妥当するものであれば，当然目的語が名詞である [±"A"] の場合にも敷衍できるものである。上で調べた構文に於いては，Leísmo の発展と Personal Accusative "A" は進行度を異にしていると考えられる。上の第 2 のグループ，[±Leísmo]，[±"A"] の出現率がそれを物語っている。後述するように，単に，Leísmo が，Personal Accusative "A" よりも進行速度が遅いとも言えないように思われる。つまり，単純にラテン語の格体系によって，これら両事象を説明することには多少とも問題があるのではないだろうか。ロマンス語の段階での独自の変化，進展を想定し，調査する必要，即ち，両事象の間に見られる発達上の類似点，相違点を考慮した精密な歴史的研究の必要があると考えられる。以上は構文別に調べたものである。次に若干の動詞に関して，当該両事象を考える。

§ 3　以下に比較的頻度の高い動詞と，注目すべきそれとの調査結果を表にまとめる。

表－Ⅳ

	Servir	Ayudar	Perdonar	(Des)Ondrar	Denostar	Engannar
[+Leísmo]	4	16	2	4	0	6
[−Leísmo]	10	11	10	22	12	0
[+"A"]	19	26	12	24	10	18
[−"A"]	1	4	0	5	1	8

	Resçebin	Socorrer Acorrer	Matar	Aducir	Ferir	Acusar
[+Leísmo]	2	0	7	1	10	7
[−Leísmo]	54	4	104	34	56	125
[+"A"]	17	11	142	13	82	132
[−"A"]	44	0	128	24	28	5

	Levar	Reptar	Dexar[注(11)]	Tomar	Prender	Poner
[+Leísmo]	1	1	1	1	10	0
[−Leísmo]	23	11	16	17	52	9
[+"A"]	2	15	8	10	15	2
[−"A"]	16	0	49	29	23	24

	Llamar(Decir)	Fallar	Dar	Vender	Guardar	Comprar
[+Leísmo]	1	6	7	3	5	0
[−Leísmo]	2	51	75	36	29	19
[+"A"]	14	18	14	3	10	0
[−"A"]	5	46	198	34	22	12

	Criar	Facer	(A)Tormentar	(Des)Amparar[注(12)]	Tener	Haber
[+Leísmo]	2	1	1	0	5	2
[−Leísmo]	34	2	30	15	58	53
[+"A"]	10	0	9	12	14	12
[−"A"]	15	28	10	12	51	365

	Proveer	Meter	Ver	Esperar Atender	Co(n)strennir	Apremiar
[+Leísmo]	3	6	0	2	0	2
[−Leísmo]	0	57	6	6	9	7
[+"A"]	11	30	10	6	7	28
[−"A"]	0	31	12	4	1	2

特定構文の場合同様，[+Leísmo] [+"A"]，[+Leísmo] [−"A"]，[−Leísmo] [+"A"]，[−Leísmo] [−"A"]のグループが考えられる。

① [+Leísmo] [+"A"]のグループ

Ayudar, Engannar, Proveer がこの部類に属する。例えば，

Part Ⅳ T (Ⅸ) L (XIX)

Et ellos deben responder que asi lo juran; et el juez debe decir que si lo fecieren asi que les ayude Dios, et sinon que él les confonda; ...

FJL (Ⅲ) T (Ⅱ) L (Ⅶ)

Contrastar devemos a los malos que non puedan mas mal fazer; ca algunos que

eran engannados por cubdicia, suelen muchos vegadas engannar á las mugieres libres, é á las manzebas, é dexan andar sus siervos cuemo libres, ...

Part Ⅳ T (Ⅱ) L (Ⅶ)

... ante deben vevir en uno, et servir el sano al otro et proveerle de las coças ...

② [+Leísmo] [−"A"] のグループ

本稿資料では，この部類に属する動詞は見られない。

③ [−Leísmo] [+"A"] のグループ

Perdonar, (Des) Ondrar, Denostar, Acorrer (Socorrer), Matar, Ferir, Acusar, Reptar, Llamar (Decir), Esperar (Atender), Apremiar がこの部類に属する。例えば，

Part Ⅳ T (Ⅸ) L (Ⅰ)

La muger al marido et el marido á la muger pueden acusar el uno al otro para departirse el casamiento, si el embargo que es entre ellos fuere atal ...

Part Ⅶ T (ⅩⅦ) L (ⅩⅢ)

El marido que fallare algunt home vil en su casa ó en otro lugar yaciendo con su muger, puédelo matar sin pena ninguna, maguer non le hobiese fecho la afruenta que diximos en la ley ante desta.

④ [−Leísmo] [−"A"] のグループ

Resçebir, Aducir, Levar, Dexar, Tener, Haber 等の動詞がこの部類に属する。例えば，

Part Ⅶ T (ⅩⅩⅥ) L (Ⅴ)

... et si alguno contra esto ficiere á sabiendas, mandamos que pierda aquella casa en que los recibiere para facer alguna destas cosas sobredichas, et que sea de la eglesia, ...

FAzL (Ⅱ) T (ⅩⅩⅩⅦ)

El sennor ha de coger el pecho, e onde no cogiere el pecho o el dannador non oviere manifiesto, aquel danno el messeguero lo ha de pechar.

Haber, Tener が特に強くこの [−Leísmo] [−"A"] の傾向を示している。

上のグループの中で②に属する動詞が見られない事実は，Leísmo 発展に関する Lapesa, R. (1968) の説，つまり Leísmo をラテン語の格体系の継承によって考える説を支持するものであると思われるが，一方，③のグループの存在，[注(13)] ①のグループに属する動詞の中でも，ラテン語に於いて与格目的語をとり得るとされているものは，本稿資料では Ayudar のみであるという事実を考慮するならば，この説を問題視せざるを得ないであろう。

Brewer, W. B. (1970)は文学テキストでの Leísmo を取り扱い，動詞を[+Leísmo]となる傾向を示すものと，[−Leísmo]のそれとに分類している。その分類は以下の如くである。

[+Leísmo] →Acorrer, (Des) Amparar, Apremiar, Ayudar, Conortar, Estorvar, Nozir, Onrrar, Servir

[−Leísmo] →Aduzir, Afogar, Derribar, Fallar, Enviar, Ferir, Meter, Mover, Tomar, Rescebir, Traer, Matar

本稿資料では，全体としてLeísmoの進行速度が文学テキストのそれよりも低くなっている関係上，文学テキストとの単純な比較は危険であるが，Brewer, W. B.(1970)は，この分類を動詞の意味特性に帰している以上，両者の資料の比較も意味を持ち得ると思われる。

例えばMatarを考える。彼に依れば，この動詞は，目的語としてLeをとる例が37例，Loをとるものが51例となっており，[−Leísmo]の動詞に分類される。本稿資料に於いては，この傾向は更に顕著であり，[+Leísmo]が7例，[−Leísmo]が104例となっている。一方，Acorrer, (Des) Amparar, Apremiar, Onrrar, Servir は，彼に依れば，[+Leísmo]の傾向を示す動詞であるが，本稿では，そうなっていない。少なくとも，[+Leísmo]の傾向は認められない。

§4

本稿の対象である法律文書に於いては，Leísmo と Personal Accusative“A” は歴史的な発達進行度を異にするものであり，特定構文の場合でも，また個々の動詞の場合でも，ラテン語の格体系の継承によって当該両事象を説明することには問題があり，ロマンス語の段階での歴史的研究の必要性が認められる。また Leísmo に関して，Acorrer, Servir 等の動詞が，テキストのジャンルによっても異なる傾向を示す可能性が考えられる。

問題提起，また研究序論的性格を有する本稿では，目的語の種類，形態，主語，動詞，目的語の相対的語順，主語と目的語の数に関する異同等の統語論的な観点からの考察は為されなかった。これらの要因は，本稿で扱った構文要因，各々の動詞による要因に併行すべきものであり，今後，更に法律文書での調査を進め，これら両事象の歴史的進行の過程を探る必要があろう。

τὸ τέλος τῆς διατριβῆς τῆς ἐλαχίστης

注

注(1)— Trullemans, Ulla(1973), Roch Valin, A. M.(1971), Roegiest, Eugeen(1979), Rohlfs, G.(1971)に依る。

注(2)— 代名詞が人間を指す場合がそうである。

注(3)— 本テキストでは le の形態も見られる。また le, les の変異体として li, lis も見られる。l' な

る語尾脱落(apocope)した形態は，本来 le, li であるのか， lo であるのか不明であるので，本稿では取り扱わない。

注(4)— 少数第 2 位を四捨五入する。

注(5)— 男性の le, les，女姓の le を含む。女性の les の用例はない。また後述するある特定構文に用いられた le, les, Personal Accusative "A" は除外してある。

注(6)— 後述する特定構文の用例は除外してある。

注(7)— 以上の構文同様，「使役」，「禁止」，「阻止」を表わす構文として Contrastar 構文， Obligar 構文， Quitar 構文， Toller 構文， Emplazar 構文，(De)Vedar 構文が見られる。しかし用例が極度に少ない為，本稿では省略する。

注(8)— Facer 構文， Demandar 構文， Dar 構文も，このグループに入ると思われるが，人称代名詞の用例が少ない為，グループ分けから除外する。

注(9)— Mandar 構文， Facer 構文， Dexar 構文， Ver 構文， Facer A–B, Llamar A–B, Decir A–B 構文について考察している。

注(10)— págs. 535～537

注(11)— Dexar の異形態である Lexar, Delexar も含まれる。

注(12)— Amparar の異形態 Mamparar も含まれる。

注(13)— 特に対格(Acusativo)がそれから派生する動詞 Acusar に於いて，この傾向が顕著である。[+Leísmo]が 7 例，[−Leísmo]が125例，[+"A"]が132例，[−"A"]が 5 例となっている。

使用テキスト

Cantar de mio Çid

Pidal, R. M. : Obras de R. Menéndez Pidal tomo Ⅳ, Ⅴ Madrid 1969

Fuero Juzgo

Real Academia Española Madrid 1971

Fuero de Alcaraz

Fuero de Alarcón

Roudil, J.: Les Fueros d'Alcaraz et d'Alarcón Paris 1968

Las Siete Partidas (tomo Ⅱ. Ⅲ)

Real Academia de la Historia Madrid 1972

参 考 文 献

Brewer, W. B. (1970)

: Extent of Verbal Influence and Choice between LE and LO in Alphonsine Prose.

Hispanic Review XXXVIII(1970) págs. 133～146

Lapesa, R. (1968)

: Sobre los orígenes y evolución del leísmo, laísmo y loísmo

Festschrift W. v. Wartburg 1968 págs. 523～551

Roch Valin, A. M. (1971)

: Le complément verbal et le morphème 《a》 en béarnais.

Zeitschrift für Romanische Philologie 87(1971) págs. 286～305

Roegiest, Eugeen (1979)

: A propos de l'Accusatif Prépositionnel dans quelques langues romanes.

Vox Romanica 38(1979) págs. 37～54

Rohlfs, G. (1971)

: Autour de l'Accusatif Prépositionnel dans les langues romanes. Revue de Linguistique Romane 35(1971) págs. 312～334

Trullemans, Ulla (1973)

: Sur le complément d'objet direct prépositionnel en portugais contemporain.

Revue Romane 8(1973) págs. 314～327